左京二条二坊十四坪の調査
－第497次

1　はじめに

個人住宅の新築に関する発掘調査である。平城京左京二条二坊十四坪の北東部にあたる。坪の南よりの調査（第189次）では旧石器の散布地（法華寺南遺跡）が見つかっただけでなく、掘立柱建物や井戸などが見つかり、奈良時代だけで７期にわたる遺構変遷が確認されている。その他、小規模な調査であるが、第345・375・377次でも礎石建物や掘立柱建物など奈良時代各期の遺構を検出しており、同坪が比較的有力な貴族が占地する場所であった可能性が指摘されてきた。

2　調査の概要

本調査は2012年７月９日より重機掘削を開始したが、遺構面までは深いことが予想されるものの、現地表面下は2.0m付近まで真砂土で、きわめて軟弱であるため、調査区の四周に矢板を打って調査を続行し、７月24日に埋め戻しを完了した。調査面積は東西７m、南北11m、調査面積は77㎡であるが、掘削深度が深かったため、遺構検出面での調査面積は32㎡である。遺構検出面の標高は60.6m付近である。

基本層序は現代の造成土である真砂土が約220㎝、その下に耕土・床土が20㎝程度あり、GL-2.4m付近で黄灰色の粘土を検出し、この面で掘立柱や土坑などを検出した。

3　検出遺構

重複関係と坪内における配置から、少なくとも３期にわたる遺構変遷がある。ただし、Ⅰ期とⅡ期については、直接的な重複関係が確認できなかったため、前後関係が反転する可能性もある。

Ⅰ　期

掘立柱塀SA10300　南北に３基並ぶ掘立柱。柱間寸法は８尺。土坑SK10305の埋土を掘り下げた面で検出した。西側に組み合う柱穴がなく、約７m東側に東二坊大路が想定されることから、南北方向の塀と考えられる。

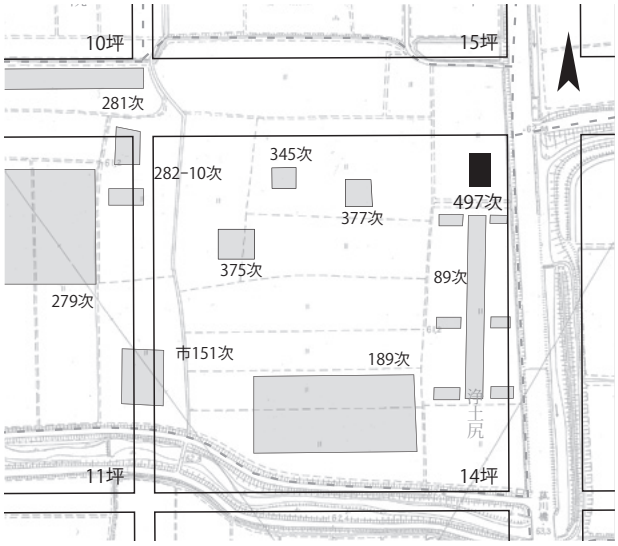

図221　第497次調査区位置図　1：2000

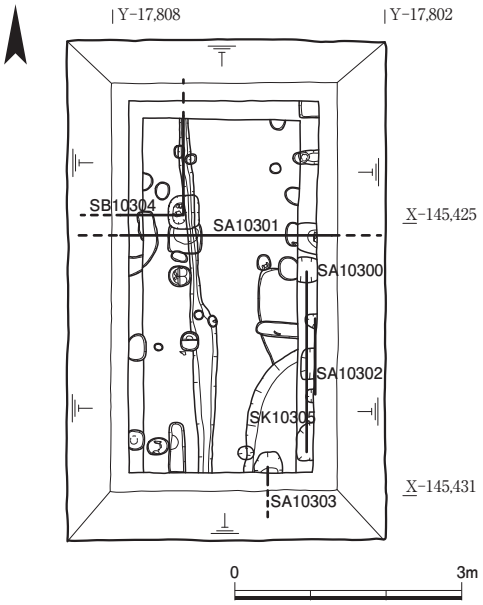

図222　第497次調査区遺構図　1：100

Ⅱ　期

掘立柱塀SA10301　東西に２基並ぶ掘立柱塀。掘立柱塀SA10300と近接する。掘立柱建物SB10304とは重複し、これより古い。柱間寸法は10尺。

掘立柱塀SA10302　調査区東端で南北２基分のみ検出した掘立柱列。柱間寸法は８尺。北でSA10301に接続する可能性もある。南端の調査区隅は調査の過程で崩落したため検出ができなかったが、さらに南に続く可能性も否定できない。

図223　第497次調査区全景（南から）

図224　第497次調査出土冶金関連遺物

表38　第497次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数		
			6760	A	1		
			室町		1		
			型式不明（奈良）		2		
	計	0		計	4		計　0

	丸瓦	平瓦	磚	凝灰岩	レンガ
重量	8.991kg	44.164kg	1.262kg	0	0.74kg
点数	102	849	12	0	8

Ⅲ　期

土坑SK10305　調査区南東隅で検出した径1.5mほどの炭混土坑。深さは20cm程度。多量の土器、瓦に混じって炭や鞴羽口、銀製品が出土した。調査区内には工房に直接関連する遺構は見当たらないことから、近隣から持ち込んで捨てられたのであろう。坪の南半の調査（189次）でも平安時代初頭に廃棄された井戸から鞴羽口や三叉熊手、ガラス製品などが出土している。この土坑から出土した土器は奈良時代後半の様相で、奈良時代末から平安時代初頭としても矛盾しない。

掘立柱建物SB10304　坪内の配置から、調査区北西に展開すると思われる掘立柱建物。抜取穴から瓦、鞴羽口、坩堝などが出土した。

時期不明

掘立柱塀SA10303　調査区南東隅で検出した掘立柱。SK10305の埋土を掘り下げた面で検出した。１基のみ検出し、北と西には展開しない。東側は条坊側溝が近いため、南に伸びる塀としておく。

その他、径0.2～0.3mの小穴を数基、検出した。埋土に炭を含むものも多く、人頭大の石が入れられているものもある。　**（神野　恵）**

4　出土遺物

金属製品・冶金関連遺物　SK10302とSB10304の柱抜取穴から簪状の銀製品、鉄片と銅熔解坩堝ないし取瓶・鞴羽口・鈹状銅滓・椀形鉄滓・砥石・金床石片・木炭などの冶金関連遺物が出土した（図224）。

石製品　旧石器が多く出土した法華寺南遺跡（第89次）が南に隣接するように、本調査区からもサヌカイト製や安山岩製の剥片が出土している。　**（小池伸彦）**

土器・土製品　SK10305から比較的まとまって奈良時代の土器が出土した。土師器にはｃ手法のⅢＡ、甕、盤など、須恵器は杯Ｂ、杯Ｂ蓋、壺、甕がある。　**（神野）**

瓦磚類　瓦磚類を表38に示す。軒平瓦は４点出土したが、いずれも細片である。6760Ａは平城宮・京出土軒瓦編年のⅣ-2期に位置づけられる（『平城報告 ⅩⅢ』、1991）。これまでに東院地区や平城宮東南隅の調査でまとまって出土している。室町時代の唐草文軒平瓦は、遺存部分では外区の圏線が下外区のみにみられることから、中世Ⅶ期に位置づけられる（山崎信二『中世瓦の研究』、2000）。

（川畑　純）